# 『郷愁』

外国語学部
英語英文学科 3年
渡邊　智佳

食い破られる。

軋んで
軋んで
軋んで

つう、と

噫、
これは棘なのか

鈍い色の血が数滴、
ぽたりと落ちて畳に小さな楕円をつくる

鼓動が飛び火する

血のだらしなく流れる指を

舌先で撫ぜれば
其処は、夏だった

流れの定まらない粘ついた風が
網戸をしつこく揺らす
生温さだけが網目を通して伝わり
一瞬、酸素を奪ってひどく困惑させる

彼(あ)の夏だ
囚われ、憬れてやまぬ、彼の夏だった

青青とした苗がそよぐさまを
瞼の裏の映写機がうつしだす
網膜に覆い焼かれた銀塩寫眞の連続が
記憶のキネマトグラフを産み落とす

波打際に落ちてゐたボタンを拾う彼よろしく
其れに邂逅し、袂にそっとしのばせた

手持ち無沙汰で
読み止しの文庫本に手を伸ばす
其れが余りにもひんやりとしていて
手の熱を認めざるを得なくなり
どこか、鼓動のないものの虚しさを感じとってしまう

文庫本を傍らに置き
カーテンのつくる日陰に滑り込む
その侭、柱に凭れ
ゆっくりと瞼を閉じる

呼吸を邪魔する鬱陶しい風は
もう何処かへ行ってしまったようだ
ひとつ、小さな深呼吸をしてみせた
時々其れはやさしく咽喉に絡んでは、
直ぐに消えた

吸い止しの煙草からぽとりと
ねずみ色した灰がゆっくりと落ちる
燃焼する薄膜の端々から夏が、
彼の夏がどんどんと消えてゆく

「此処にはまるで何もない
だからこそ事足りている」

風鈴が鳴いた

夏だった。

郷愁だと感覚する暇さえ与えず
内から只管に食い破る
彼の、夏だった

風鈴が揺れる

つう、と痛むのは鼓動